

Title	近代の京漆器意匠(2) : 神坂雪佳と明治中期の京漆器
Author(s)	福田, 民郎
Citation	デザイン理論. 1987, 26, p. 45-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52549
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

※ 近代の京漆器意匠（2）

——神坂雪佳と明治中期の京漆器——

山内 明・佐藤 敬二

1. まえがき

神坂雪佳は幕末に生れた図案家で、昭和17年（1942）1月4日、76才で没した。昭和19年5月には、京都市美術館でその遺作展¹⁾が開かれ、絵画、図案、雪佳図案による各種の工芸品など、約150点が陳列された。そのうち漆器は、代表作とされる祭礼図六角行器形飾箱（写真1）を含む約40点である。

同年10月には、遺作展出品の31点を写真印刷とした簡単な遺作集²⁾が出ている。これには年譜、印譜が付き、竹馬の友、稲畑勝太郎の序文がある。物資不足の当時では、それでも精一杯の記録だったと思われる。

戦後、明治百年の歴史が振りかえられたとき、雪佳は琳派調の蒔絵意匠を得意とした図案家として、また京都工芸界のリーダーとして位置付けられた³⁾。雪佳は帝室技芸員の候補にあがっていながら、最終的には選考されなかったというが、候補となったこと自体が、雪佳への当時の社会的評価を示している。

近年になって、榊原吉郎は、今日では一般の人々に忘れ去られている人——としてこの神坂雪佳の画業と芸術を発掘した⁴⁾。次いで、雪佳のスケッチ、絵画草稿、工芸品図案・下絵を出版した⁵⁾。また雪佳の海外視察の跡も、論文に

※ “幕末明治期の工人”：漆工技術に関する講演会テキスト 山内明（1987・3・3）を、近代の京漆器意匠(1)とする。



写真1. 祭礼図六角行器形飾箱

まとめている⁶⁾。

しかし、雪佳は、絵画に始まり、陶芸・漆芸・染織・木工・金工など工芸全般に亘り、さらに室内装飾や庭園にまでおよぶ広い範囲で活動している⁴⁾。雪佳の図案家、工芸界のリーダーとしての歩みについては、画家としての面とは別の検討が必要であろう。

この小論では、生いたちから、明治36年最後となった第5回内国勲業博覧会までの漆器を中心とした、神坂雪佳の図案家としての歩みを扱った。この時期は、彼の真面目を発揮する後半期への準備段階である。

2. 生いたち

神坂雪佳は本名を吉隆という。慶応2年(1866)1月12日神坂吉重、シゲの長男として京都粟田口に生れた²⁾。父は、御所勤めの武士であった。向い隣に



写真2. 神坂雪佳

は生涯の友、稲畑勝太郎が居た。4才年長の勝太郎は、幼い時から目立った存在であったから、恐らく雪佳はその歩みを興味をもって見続け、大きな影響を受けたと思われる。

稲畑勝太郎は、伝記⁷⁾によれば文久2年(1862)10月、烏丸御池にあった菓子屋に生れ、元治元年(1864)の兵火で家を焼かれて慶応元年(1865)に三条大橋東入に移っている。明治5年(1872)6月には、粟田小学校在学中、来校の明治天皇の前で「日本外史」の一節を誦読する名誉を得た。

明治9年京都府師範学校入学。続いて10年15才の時には京都府から仏国への留学生に選ばれている。勝太郎の課題は染色学であり、他に織物の近藤徳太郎、製糸・撚糸の今西直次郎も同じ留学生仲間であった。

知られているように、維新後の京都産業は未曾有の変革に低迷を続け、その将来を、新しい動きの中に求めていた。雪佳は当時11才、身近かな先輩、勝太

郎が、横村知事の積極的な勤業政策に沿って、こういう前途のある役割を負ったことに、強く刺激されたに違いない。

明治14年、雪佳は四条派の画家鈴木瑞彦に入門²⁾した。絵は幼少の頃から好んだという⁸⁾。瑞彦は、系譜(図1)に見るとおり塩川文麟の門下であった。塩川文麟は明治初期京都画壇に創設された如雲社のリーダーであり、10年に没するまで円山派の鈴木百年と京都画壇を二分する勢力を持っていたと言われる⁹⁾。

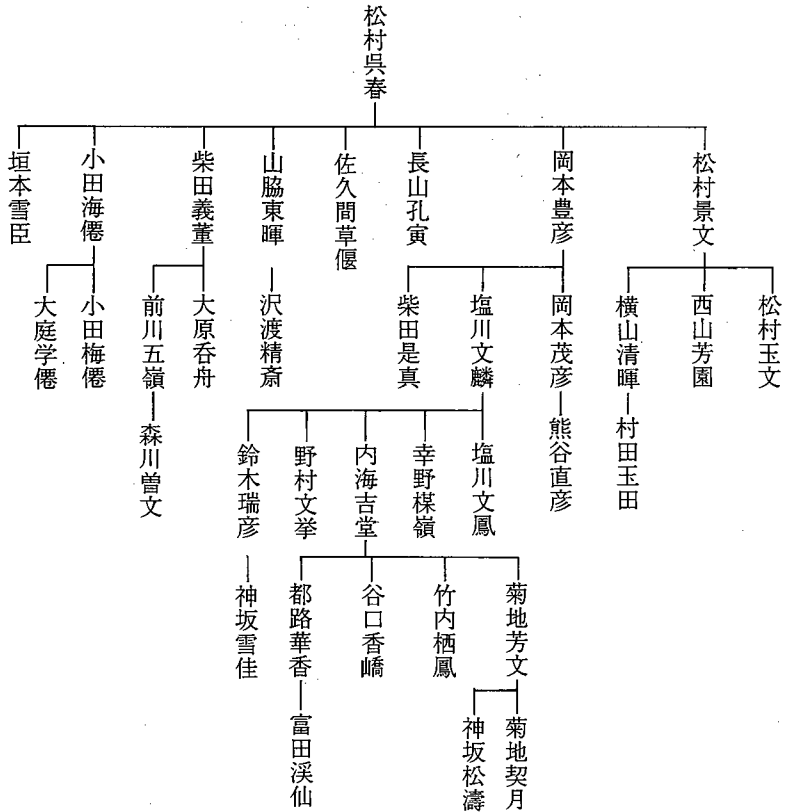


図1. 四条派系譜

瑞彦は、文昂と号し、明治6年第2回京都博覧会で行なわれた席上揮毫画家のひとりに選ばれている。明治13年には京都府画学校が設立されるが、彼はこれにも関係し、創立当初からの教員として出仕している。¹⁰⁾

四条派の特徴は、写生を重視しながら、その力点を画家の眼の側に置くことにあった。円山派が写生対象を忠実に写し取ることに意義を認めるのと対照的である。四条派は画家の詩情を重んじ、筆意の面白味を大切にた³⁾。雪佳の意匠は、当然彼の画歴がこういう四条派から始まったことと、深く結び付いている。

雪佳には、工芸意匠家としての彼の生涯に深い関わりをもった、辨之助、祐吉という二人の弟があった。

四男辨之助は、明治15年(1882)生れ¹¹⁾。雪佳はすでに16才であった。辨之助も長じると画を志し、四条派の菊地芳文の弟子となり松濤と号した。彼もまた図案に興味を持ち、雪佳に近い経歴を歩んでいる。雪佳との共同制作もあり、戦後、昭和29年(1954)没まで、さまざまに影響し合ったことが考えられる。

五男祐吉¹²⁾は、明治19年(1886)雪佳20才の時の出生である。のち蒔絵師富田幸七の弟子となり、蒔絵を中心とした漆工の技術を専門とした。富田幸七¹²⁾は、5代山本利兵衛の弟子、この一派は京蒔絵の本流であった。

祐吉は、明治30年代なかばから新古美術品展などに出品、いくつかの賞を得ている。しかし本格的な活動は40年代に入って佳美会に参加するようになってからである。40年代以降は、雪佳図案の漆器で彼の手になるものが少なくない。工芸意匠の中でも蒔絵文様を中心に活躍した雪佳にとって、この祐吉は、欠くことの出来ない存在であった。

3. 図案家としての出発

明治20年、雪佳は川島織物工場に入り、織物図案を実地に研究したと言⁸⁾う。彼の図案家としての歩みの最初の記録である。

次いで明治21年、年譜²⁾は、「欧州ヨリ帰朝サレタ品川弥二郎子爵ニ面接ス 裝飾芸術ニ関スル説ヲ聞キ大イニ得ル處アリ 當時下絵畫工ナル職業意識ノ下ニアル图案家ノ向上ヲ 図ル可キ必要ヲ痛切ニ感ズ」と書いている。また竹馬の友稲畑勝太郎も、「君ガ後來 我国第一流ノ图案家タルノ素地ヲ得ラレタノハ 品川子ノ指針宣シキヲ得タ為デアル。」とその出会いが彼の生涯に重要な意味を持つものであったことを指摘している。

品川弥二郎¹³⁾は、20年3月特命全権公使の任を了え、ドイツから帰国した。特命全権公使としては2年足らずの勤務であったが、彼には明治4年から9年までのドイツを中心とした滞欧歴があり、先進国の事情は熟知していた。農商務省の高官歴を持つ彼は、産業発展に果たすデザインの役割について、いろいろな点を学んでいたに違いない。

弥二郎は帰国して間もなく京都に来て、高倉錦小路に尊攘堂を建てた。元治元年禁門の変で没した同僚の霊を祀るためである。21年8月には、その25年祭を営んでいる。こういう事情の中で雪佳は弥二郎に逢った。

榊原吉郎は、弥二郎のデザインへの関心、そして勝太郎を介したであろう雪佳と弥二郎の出会いについて、その著⁵⁾で興味ある考察を試みている。一介の图案家に終らなかった工芸界のリーダー神坂雪佳を方向付けた原動力が、この弥二郎との出会いにある。

この21年の2月には、京都府画学校に新たに应用画学科が増設され、修学年限も3年から5年に延びた¹⁰⁾。校則改正案は、明治13年設立時の「諸製作 諸工芸ノ基礎ヲ正シクスル」という絵画の応用的側面が、一向にその効果を上げないために、「今ヤ工業美術ニ於テ人心研究ノナカルベカラザルヲ知ルノ時機ヲ得……絵画関係ノ工業ノ実益ヲ与へ候ヨウニ」この科を設立したいと述べる¹⁰⁾。時代は従来以上に役立つ图案を求め、その為の専門技術教育機関の必要性が痛感されるに至ったのである。雪佳の歩みは、正に時代と共にあった。

雪佳の年譜明治23年の項には、「帝室技芸員岸光景ノ門ニ入り 各種工芸ノ

組織 オヨビ意匠圖案ノ指導ヲ受ク マタ裝飾芸術トシテ世界ニ類例ノナキ
我国琳派ノ研究ニ没頭ス」とある。

光景が、明治の工芸界が最高の名誉とした皇室技芸員となったのは明治39年のことであるが、20年代の光景は、農商務省の産業振興政策、なかでも意匠改良という極めて具体的な任務を担当していた。さまざまな催しに関係し、しばしば京都にも出向いている。

光景は明治21年には、京都府が積極的に開設した第3回関西府県聯合共進会に、農商務省から審査官として派遣され、漆器の審査報告を担当した。彼は、蒔絵は京都の名を恥かしめる程に見るべきものがない。内外の需要に適應せず、退歩が甚だしい。ただ内地用飲食器の塗師の作には形・髹法に少し良いものが見られる、と評している。¹⁴⁾

23年10月14日、光景は京都府から美術工芸考案および改良の事務を囑託された。¹⁵⁾恐らく京都の行政が、この面に専門の技術者を充当した最初であろう。

雪佳が光景に師事するようになった事情については、知られていない。京都府の囑託となった著名な光景を訪ね、その教えを乞う事にしたのだろうか、何であれ、単に意匠圖案を教わることを目的とせず、年譜に見るような産業政策に関わる各種工芸の組織といった問題まで学ぼうとすれば、光景は当時の最適の師であったと言える。

岸光景は、天保11年(1840)9月15日江戸に生れた。幼時から父に絵を学び、谷文晁の門人目賀田文村に師事した。光景の絵は南画、土佐派、光琳などの影響を受けた一種高雅流麗な画風であると言う。また彫刻にも巧みであったし、古土佐、琳派、乾山などの影響を受けた意匠圖案もよくしたと言う。¹⁵⁾

雪佳の琳派の研究は、この光景の指導あるいは影響から始まったのであろうか。

当時の雪佳圖案の一例は、京都書林発行の「新圖案」で厨子棚¹⁷⁾、蒔絵文様水辺菊秋草図¹⁸⁾に見ることができる。

明治26年秋、雪佳は光景と相談し、新作を芦手様に描く芦手絵会を計画した。参加者は雪佳のほか竹内栖鳳、谷口香嶠、菊地芳文、竹内茂也らで、テーマを、古今集、秋の部から選び、随意に芦手で描き陳列する催しである¹⁹⁾。翌年1月にも、さらにメンバーを増し、テーマを同じく古今集の春の部として開いた。この時は賛同者として西村彦兵衛、山本利兵衛、富田幸七も出席、絵の優劣の評者としては、富岡鉄斎、雨森菊太郎も招かれている。出品図案は、抽選で頒けた²⁰⁾。

次いで6月は古今集の夏と恋の部がテーマ。集まった絵は、前回と同様、鉄斎、菊太郎らが評を下し、秀作には賞品を与えた。この時、雪佳の絵は時鳥の和歌を用い、図案は「水ニ添タル藁屋アリ、杉ノ木立深く、遠山ニハ杉アリテ、時鳥空ヲカケル、濃淡ノ墨畫ニ金泥ヲ引ク」という図柄であった。彼の図は秀作の筆頭となった²¹⁾。

当時、陳腐な蒔絵意匠を批判する場合、逆に理想的な意匠として平安末・鎌倉期以来の歌絵意匠を持ち上げることが多く²²⁾、そのため漆器創作には、競って新しいテーマ、新しい構図による芦手の歌絵蒔絵の意匠が試みられた。

4. 第4回内国勸業博出品

岸光景履歴書の明治24年4月1日の項に、「美術学校教授ヲ囑託ス 京都府知事北垣国道」とある。当時の京都の美術学校は、同日付けで京都市画学校から京都市美術学校に名称を改め、応用画学科は工芸図案科に変更し甲部5年、乙部3年の2コースとしている。また新しく美術工芸家の依頼に応じ、図案を作成することについて製図規定を定めた¹⁰⁾。工芸図案面の教育の充実と、産業界の図案の要望に応じる具体的処置の設定である。岸光景はその為に着任したのではなかったか。もっとも、その後25年9月にはどういう事情だろうか、依頼免職の処置がとられているから、実質1年に充たない期間ではほとんど活躍の余地はなかったと思われる。〔注〕

〔注〕岸光景の京都市美術学校囑託教授就任の事については、京都市立芸術大学編の「百年史」には記載されていない。

岸光景の画歴と、工芸意匠面の才能については、先に紹介したが、彼はこの特技を以って、明治政府に用いられた。まず明治3年1月には宮内省の宮内史生となり¹⁵⁾、5年には京都、奈良の社寺宝物の巡回調査に参加した。6年、米
国フィラデルフィア万博関係の出品製図担当を命ぜられ、9年は、奈良へ出張し、正倉院御物の調査に当たっている。次いで明治10年に内国博が開催されるとその美術審査官となり、以後14年の第2回に同じく美術審査官、23年第3回内国博では美術以外の第1部、第5部の審査官も勤めた。

ほかに、11年の龍池会誕生への参加、精工社での図案担当、18年五品共進会での指導的役割、石川県の工芸指導など、その実力は各方面で発揮されていた。²³⁾

明治26年7月7日、雨森菊太郎、熊谷久兵衛、西村治兵衛を幹事として京都奨美会が発足した。²⁴⁾同規約第1条には「京都美術工芸ヲ奨励シ 其ノ發達進歩ヲ謀ルヲ目的トシ 先ズ第四回内国勸業博覧会ニ本会ノ製作品ヲ出スモノトス」と規定している。²⁵⁾

知られるとおり、明治28年には建都1100年記念祭が盛大に行なわれたが、第4回内国勸業博もこの行事と併行して同じ岡崎地区で行なわれることとなり、全市を挙げての強い要望でこれらのことが決定された²⁶⁾ 関係から、博覧会への出品物についても、この奨美会がリーダー・シップをとるべく発足した。

岸光景は、出品物の種類を選定し、図案を作成するこの会の委員に選ばれた。26年9月中旬には、光景の入浴を機に早くも書棚、文台、硯箱、小箱の図案と製作依頼先が検討された。²⁷⁾10月にはそれを総会で決定、続いて委託先との打合わせ、約定書の作成が行なわれている。製作の取締まりは山本利兵衛が担当した。²⁸⁾

審査の結果、奨美会出品物5点は、2等賞4点、3等賞1点の好成績を取めた。(表1参照)また、妙技1等賞は、これら個々の賞に上積みして、京都奨美会の蒔絵各種に贈られた。²⁹⁾記録によれば、厨子棚は桜と菊を詠んだ2首の

古歌から作られた歌絵の意匠で、上段厨子の扉は霞の中に研出蒔絵の桜花，下段の戸は蒔絵で鳧と菊を描き，螺鈿の蝶を添え，棚の柱もまた螺鈿による装飾であった。手箱は蓋裏にみすの中の紫式部を蒔絵で描いたもので、「研出シハ最モ繊巧ニシテ……」と述べている。蒔絵は富田幸七である。硯箱と文台は一組の伝統的な住吉の図である。硯箱は「好意匠ニシテ 技術ノ変化モマタ頗る佳良ナリ」とあり，文台は、「波ノ描法中少シク 不整疑滞ノ箇所アリシガタメニ 1等ヲ貶セラレテ妙技三等ニ入レリ」としている。

また全般については，京都は奨美会を設立し，考案家を招いて図案設計を託し，山本利兵衛を中心とする技術者を選択して製作に当たったのが好成績につながったのだと分析した。前回23年第3回国博第2部の出品は鈴木長次郎ただ一人の出品で褒状を得たに過ぎない状態であったため，今回の成果は関係方面の賞讃を浴び，審査総長九鬼隆一は「漆器の改良の著しきは京都にして，東京是に次ぐ」と述べた。³⁰⁾

この時，岸光景は別に東京出品の漆器についても図案を担当していた。ひとつは川之辺一朝作蒔絵夏秋草書棚，他のひとつは川之辺平右衛門作蒔絵籬菊手箱で，いずれも古歌や古い物語から取材する歌絵である。前者は妙技2等賞，後者は妙技3等賞を得ている。このように光景は歌絵を以って江戸末期以来の陳腐な蒔絵意匠に新鮮味を加えようとしたのであるが，その意図について記録²⁹⁾は次のように伝える。

表1 第4回国勸業博覧会奨美会出品受賞

賞	品名	製作
妙技2等賞	春秋蒔絵螺鈿厨子棚	塗り・木村表斎 蒔絵・山本利兵衛・戸嶋弥兵衛
妙技2等賞	色紙蒔絵桑書棚	木地・松中由兵衛 蒔絵・富田幸七
妙技2等賞	石山蒔絵蓋裏手箱	製作・湯浅久吉 蒔絵・富田幸七
妙技2等賞	住吉蒔絵硯箱	蒔絵・熊谷正太郎
妙技3等賞	住吉蒔絵文台	蒔絵・鈴木長二郎

「岸氏が歌絵会ヲ開始シタル趣意ヲ聞クニ今ノ技術者一般ニ意匠ニ乏シキガ故ニ 景色ヲ描ケバ近江八景 芳野 龍田 富士 三保ノ外ヲ知ラズ 花紋ヲ描ケバ 四季ノ折枝 花ノ丸 松竹梅ノ他ヲ知ラザルガ如キ卑近ニ安ンズルノ習俗アリ 是等ノ徒ヲシテ歌絵ノ趣味ヲ知ラシメバ 一ハ圖案ノ区域ヲ拡ムベク 一ハ歌意ヲ考ヘ文字ヲ習フノ良風俗ニ化シテ技術者ノ思想ヲ 高尚優美ノ点ニ傾注セシムルノ手段トモナラザランヤトノ意ニ出タリト 果シテ然ラバ 一回一回ヲ重ネテ 意匠練磨ノ功ヲ積マバ ツイニハ歌絵ノ佳境ニ入ルヤ疑ヒナキナリ」

29年2月、岸光景は引続き京都奨美会を継続させる意義と必要性を市会参事会へ提言³¹⁾、奨美会は継続して活動することになった。雪佳は光景の助手として活躍するのである。

5. 京都漆工会

第4回国勧業博の成果は、京都の漆工界を活性化した。同じ年の12月には内貴甚三郎、西村彦兵衛、三上治助、三上幸三郎、山本利兵衛らが集まって京都漆工会設立のことを協議した³²⁾。

翌29年2月9日に京都倶楽部で出席者300余人を集めて発会、役員として会頭三井八郎次郎、副会頭雨森菊太郎・内貴甚三郎、商議員今泉雄作・大沢敬之・熊谷直行・丹羽圭介・金子錦二・伊藤貞文・林新助・大伴源之助・初瀬川徳松・山本利兵衛・岩村源之助・平尾七郎左衛門・池田清助・三上幸三郎・西村彦兵衛・加藤小兵衛・三上治助ら25名、幹事林新助・三上幸三郎・西村彦兵衛ら、委員葛川助二郎・戸嶋弥兵衛・大沢芳太郎・京極治三郎・木村表斎・大橋庄兵衛・神坂雪佳・谷口香嶠を選出、事務所は京都漆器商工組合事務所内に置いた³¹⁾。

当時、31年に「全国漆器漆生産府県連合共進会」を京都で開催する予定があり、その為の業界の結束が意図されていた。事業計画は、競技会を開くこと、図案を募集すること、漆工の教育を奨励することなど7項に亘る。競技会は3月・9月に、図案会は5月・11月に開くことを決定した。³¹⁾

続く3月には富田幸七らの提唱によって、京都青年漆工会も組織された。会則は「漆工家ノ青年相提携シ、斯道ヲ研究シ智識ヲ交換シ、製作上ノ改良ヲ謀ルヲ以テ目的トス」という。³²⁾ 徒弟制度による狭い社会の中に生きてきた若人達が、その枠を越え、互いに研鑽しようとする最初の集いである。事業計画には、図案や参考品を持ち寄っての研究会、先輩などによる講演会、博覧会共進会への出品などを挙げている。

第1回図案会は、予定どおり5月20日開催された。この会の為には、特に図案会委員に、今泉雄作・伊藤貞文・丹羽圭介・金子錦二・湯浅治助・山本利兵衛・福住熊次郎・戸嶋弥兵衛・谷口香嶺・大沢敬之・神坂雪佳が選ばれていた。課題は3件あって、寿賀に用いる広蓋の蒔絵の図、小吸物椀の形状、洋風室内飾りの煙草入れであった。応募は150余点にのぼったが、1等は該当なし、2等光悦好屑屋形巻煙草入・西川源治郎、3等虫籠形巻煙草入・迎田嘉兵衛、3等魚籠形巻煙草入・古谷紅麟という結果であった。³³⁾ 3点とも洋式の巻煙草入であるのは、新しい動向への意欲が伺えて興味深い。

8月7日、京都漆工会は入洛した塩田真を迎えて講話会を開いた。³⁴⁾ 塩田真は、明治6年ウィーン万博に関わって以来の勸業政策推進のリーダーであり、28年京都で開催した第4回内国博では第1部工業部門の漆器担当審査官のチーフであった。

彼は、目前の31年共進会、33年予定のバリ万博を意識し、業界が今からそれに備えて行くべき事を訴えた。また京都の状況が、意匠面で多くの遺産を抱えながらその活用が不十分であることを指摘、伝統から生れる新しい意匠を求めた。

29年9月22日には、予定した京都漆工会の第1回競技会が開催された。審査長今泉雄作、雪佳は金子錦二、丹羽圭介と共に審査員を勤めた。この時青年漆工会も同じく第1回競技会を開催した。ここでも雪佳は金子錦二、山本利兵衛、湯浅久吉、熊谷庄太郎、三上治助らと審査員を勤めた。³⁵⁾

こうした状況の中、京都市では8月に京都市立工芸図案調製所を設立し、雪佳はその主任となった。

またこの夏、市参事会から雪佳に漆器意匠の考案について委託があり、考案顧問となった師の光景と共にその任についた。¹²⁾

日本漆器蒔絵共進会からは功労賞を受けた¹¹⁾ことが知られている。

31年の共進会、33年のパリ万博を前にして、雪佳は行政からも業界からも漆器意匠改良の推進者として大きく期待されていたのである。

31年4月12日、岡崎の内国博会館を会場に全国漆器漆生産府県連合共進会が開催された。³⁶⁾名のとおり、漆器のほかに製漆業界も含め、ほかに仏壇仏具業界、京都箆筒商同盟会などの参加も見られる、漆に関連した幅広い業界を背景とした催しである。

出品審査結果の上位の成果をみると1等賞は21名のうち京都が5名、2等賞29名中、京都7名である。京都の1等5名の内訳は、漆器関係、春秋蒔絵草花書棚・三上治三郎、逢坂山蒔絵料紙文庫硯箱・京都奨美会、須磨明石蒔絵文台硯箱・三上幸三郎。製漆関係、岡本専助、加藤小兵衛である。同じく2等賞7名は、漆器関係2、仏具関係2、製漆関係3であった。³⁷⁾

京都奨美会の料紙文庫硯箱は、例によって光景の考案であり、作図は谷口香嶠である。奨美会では、ほかに賞にならなかった蒔絵葵祭文様書棚も出品していた。

逢坂山蒔絵料紙文庫硯箱は、謡曲でも知られる蟬丸の故事をテーマにしたもので、文庫³⁸⁾は蓋裏に蒔絵で楓・秋草・竹垣を描いて逢坂山の風情を現わし、

蓋裏には、博雅三位を象徴する流水啄木の四字を散らした半開きの扇子を描いている。扇面は金地、文字は螺鈿、扇子の周囲に忍草と野菊を蒔絵で配する。蒔絵は富田幸七と鈴木長次郎である。

硯箱³⁹⁾は、蓋表が老樹の下のわび住まい、流水に秋草の茂る土坡で、肉合研出蒔絵で流水には貝を用いる。蓋裏と身の内は一体化した構図で、琵琶とこおろぎを描く。言うまでもなく琵琶の名手蟬丸に囚んでいる。水滴には銀の調子笛を添える。

この2品は京都府に買上げられて、明治天皇に献上され、のち天皇崩御に伴って遺品として下賜された。

書棚⁴⁰⁾は、高さ2尺3寸8分、幅2尺7寸8分、奥行1尺2寸、厨子を2個持つ厨子棚の変形様式である。文様は2の棚の厨子扉表の御所車蒔絵を中心に、1の棚の厨子扉面に上賀茂神社々頭、地袋引違い戸にならの小川の蒔絵である。蒔絵は山本利兵衛、富田幸七、熊谷正太郎が担当した。

6. パリ万博出品

30年1月、五二会に京都図案部が新設され、雪佳はその幹事となった。3月にはその第1回懸賞図案会が行なわれ、雪佳は審査幹事となっている。そして4月、五二会が発行する木版刷りの図案雑誌『新図案』の編集を担当した。

五二会とは、殖産興業のために熱狂的な活躍をした前田正名（嘉永3年・1850～大正10年・1921）が官を辞して組織した業界団体である。彼は、織物・陶器・銅器・漆器・紙類の5品を生産する全国の同業者の集い五種大会を明治27年4月京都で開いた。これに雑貨・敷物が加わったのが五二会である。28年10月には京都物産品評大会を開いている²⁶⁾。

同じく4月1日には京都美術協会主催の第3回新古美術品展が岡崎で開催され、雪佳はここでも展覧会の図案係となった。

知られているように、京都美術協会は、すでに23年1月6日、京都の美術と

工芸を振興することを目的として、全分野を網羅した組織として発足していた。28年10月開催の第1回新古美術品展併設出品図案展に、雪佳は古今集歌意香炉陶器図案を出品し、2等褒状を受けた。⁴⁰⁾

雪佳の仕事の大きな部分が、以後京都美術協会を基盤として展開する。31年9月には機関誌『京都美術協会雑誌』の編集者、33年には協会評議員、第6回新古美術品展では審査員となり、その後も度々その任に着いた。

一方、京都奨美会では、かねて宮内省から用命のあった書棚・文台・硯箱を30年春から製作にかかる段階となった。この3点の図案は例によって岸光景、そして下絵製作は雪佳である。

書棚⁴¹⁾は、引違いの地袋に中段の厨子を備えた通常厨子棚と呼ばれる形式である。黒塗りに最も複雑な肉合研出という蒔絵技法が用いられた。甲板は遠山に秋空を渡る雁の列。厨子扉は、萩・すすき・菊・刈萱の図。そして地袋の戸は、流水に土坡、楓の樹という図柄であった。甲板の蒔絵は熊谷正太郎・迎田嘉兵衛の担当。厨子扉のそれは、山本利兵衛・富田幸七の担当である。

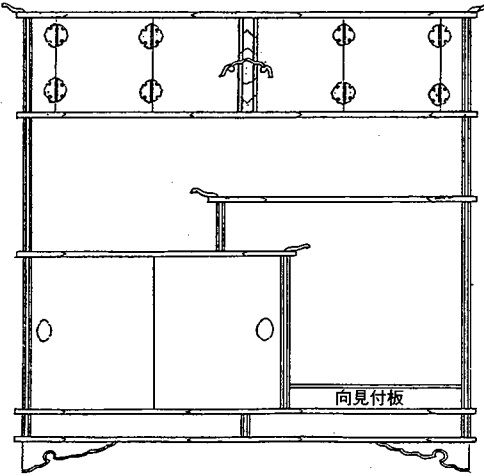
文台と硯箱⁴²⁾は、後者が春のモチーフで、つくし・たんぽぽ・蝶の図、文台が秋、流水に八重菊・萩などの図柄であった。蒔絵担当は、富田幸七である。蒔絵の進行に伴って、雪佳は細かい指示に忙しかったであろう。

30年春には、33年パリ万博への準備も始まった。10月には奨励協会が組織され、雪佳はその評議員となった。

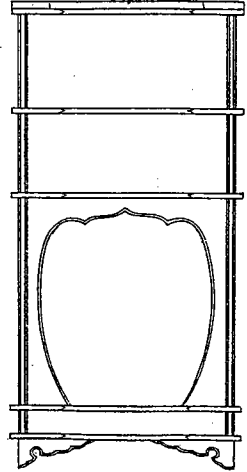
この万博には政府も力を入れ、諸外国に日本の美術・工芸について理解を求めするための『帝国美術略史』を編纂、配布したが、出品者に対しても製作費補助を考えた。パリ万博では一般工芸品と、美術館陳列予定の優等工芸品に分けられていた。政府は後者の出品物についてあらかじめ図案を提出させ、その製作費を補助することにした。

京都奨美会はこれに応じ、蒔絵書棚⁴³⁾の図案がこの選に入った。製作費5,000円のうち1,500円の補助が決まった。因みに漆器関係の補助は他にも1点あ

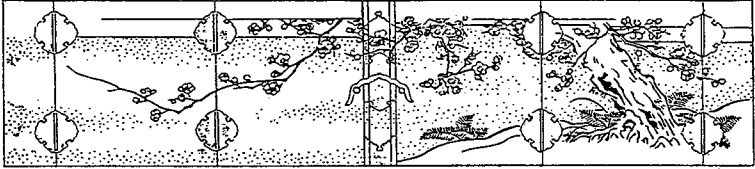
1. 正面



2. 右側面



3. 天袋



4. 地袋



図2. 平目地春秋蒔絵書棚

て、東京の白山松哉出品、雁来紅ノ図四ツ折屏風半双が5,780円のうち2,500円の補助を受けた。

書棚の考案は岸光景、雪佳は考案助手と書かれている。棚の高さ3尺、幅3尺、奥行き1尺5寸、天袋は4枚扉の観音開き、筆返しの付いた中棚、そして左下に引違い戸の地袋がある。側面には、右と左で位置をずらせて格狭間を作り、柱は唐戸面を取って荒い金粉の蒔付けにした。

図柄は、春秋の草花をモチーフとした肉合研出蒔絵で、甲板および天袋の両側面、背面は春草の図、天袋の正面4枚の扉は老梅の図、その他は秋草の図で、中棚の上面、地板、地袋の引違い戸、上面、両側面、背面、両側の格狭間周辺には、りんどう・藤袴・おみなえしなどを描く。(図2)

地相は黒漆塗の全体に、一部焼金・青金をとりまぜた平目粉を置き、ほかし蒔絵で霞を入れる。絵は研出し、錆上げ、上描きなどの技法を駆使し、梅花は白梅に見立てて、貝を用いた。春の部の蒔絵は富田幸七が担当、秋の部は山本利兵衛が担当した。

この平目地春秋蒔絵書棚は、審査の結果金牌を得た。報告書⁴⁴⁾は、「岸光景ノ書棚、……高評ヲ得タリ。只一般ニ出品物ノ価格非常ニ不廉ナリシハ 外国人ヲシテ驚ヲ喫セシメタル所ナリ。」とするす。

雪佳は、別に綴織テーブル掛図案も募集図案として提出し、優等工芸品図案中甲2点のうちの1点に選ばれ、賞金60円を得た。

7. 第5回内国勸業博出品

明治33年4月、先に設定された京都市立図案調製所は、京都市美術工芸学校に移管され、同校の図案調製部となった¹⁰⁾。雪佳は同年5月その技師に任ぜられ、同時に古谷藤太郎(紅麟)、竹内泰蔵が技手に決定した。以後大正14年(1925)の辞任まで、京都美校は雪佳の25年に亘る活躍の場となった。因みにこの33年3月末には、絵画の師鈴木瑞彦が同校教諭を辞任している。

この年にはまた京都奨美会に英国王室の室内装飾用蒔絵飾棚の用命があり、その意匠図案は雪佳が担当したと伝える¹²⁾が、詳しくはわからない。

京都美校では、33年竹内栖鳳をバリ万博視察のため仏国へ派遣した。続いて34年7月には、雪佳がグラスゴー万博の視察とヨーロッパ各国の工芸図案調査のために海外へ旅立った。雪佳のグラスゴー万博の調査については、榊原の若干の考察⁶⁾がある。

35年1月帰国した雪佳は、3月には第2回全国模様図案競技会審査員となった。次いで4月開催の第8回新古美術品展には、図案部、彫刻部、織物部、漆器蒔絵部、各種工芸部の各分野に亘る審査員を勤めた。そして8月には、長い船旅を反映した波のパターン96葉を集めた図案集「海路」を刊行した。

この時期、ヨーロッパの工芸界ではバリ万博を頂点とした新しい美術・アールヌーボーが一世を風靡していた。また雪佳の訪れたグラスゴーでは知的な形体のマッキントッシュの意匠も注目を集めていた。この外遊が彼の意匠にどう影響したか、興味のあるところである。

少し後になるが、明治40年10月の第6回関西美術会展の出品物に、杉林古香作・ヌーボー式模様菓子盆¹²⁾というのがあり、その図案は雪佳が描いている。菓子盆がどのような図柄でどういう経緯で作られたのかはわからないが、雪佳がアールヌーボーの様式を意識して採用したことは明らかである。

しかし、帰国間もないころ、彼は雑誌『図按』⁴⁵⁾に寄せた一文で、アールヌーボーを価値のない様式図案であると酷評し、渡航以前には、注文によって多少アールヌーボーを応用したこともあるが、「今後、余ハ新美術ヲ応用スルノ意志ナシ」と言い切っている。

上記の2つの事実に見られる矛盾は、雪佳のこの時期以後の歩みの中で、他の活動とどう関わるのか、その検討はひとつの課題である。

明治36年3月1日、第5回内国勲業博覧会は従来より会期を長くして大阪で開催された、最後のものである。京都漆器の出品は、2つに別れ、第5部漆器

表2 第5回内国勲業博覧会京都関係受賞

賞	品名	考案	出品	製作
2等賞	蒔絵螺鈿立浪手箱	神坂雪佳	京都奨美会	塗り・新畑市兵衛 蒔絵山本利兵衛
2等賞	蒔絵柳橋文台硯箱	神坂雪佳	西村彦兵衛	蒔絵・富田幸七
3等賞	蒔絵須磨浦手箱	神坂雪佳	近田嘉兵衛	—
3等賞	蒔絵曙書棚	神坂雪佳	三上治三郎	蒔絵・富田幸七
褒状	蒔絵柳桜料紙文庫硯箱	神坂雪佳	京都奨美会	塗り・岡田表寛 蒔絵・山本利兵衛
褒状	蒔絵竹手箱	神坂雪佳	三上幸三郎	塗り・熊谷正太郎
褒状	蒔絵藤波小棚	古谷紅麟	戸嶋新次郎	—
褒状	蒔絵海原千鳥文台硯箱	古谷紅麟	木村 秀雄	—
褒状	蒔絵瀟湘八景料紙硯箱	三宅呉曉	池田 清助	漆り・春井清平
褒状	蒔絵波千鳥文台硯箱	—	木村 表斎	蒔絵・富田幸七
褒状	蒔絵草花卓	—	三上幸三郎	蒔絵・迎田秋悦

産業は、出品者33人、出品347点、第10部美術工芸は、出品者15人、出品34点であった。後者出品物のうち11点については各種の賞を得た。表2はその一覽で、そのうち6点は雪佳の考案、2点は美校図案調製部技手古谷紅麟の考案であった。⁴⁶⁾(表2参照)

2等賞蒔絵螺鈿立浪手箱は、平忠度歌巻物の下絵の波を用い、波頭を貝とした点、手箱全体に描き詰めたところがすぐれているとされた。柳橋図の文台硯箱の方は、よく知られた柳橋に流水の桃山屏風のテーマである。構図の位置や、作製様式を桃山調に適合させようとした配慮が評価された。

1等賞は、赤塚自得作蒔絵無地荒磯額面であった。蒔絵に白金粉を用いたのを新しい試みとして高く評価した結果である。この賞については、後日京都側から適切でないとの批判が出された。理由は、併用した金工の方が主になって、蒔絵は添え物になり、且つ蒔絵の波のレイアウトが十分練れていなかったためという。審査に作品の優劣以外の要素が入ったという見方のあることを指摘し、「説ノ如クナラシメバ コレ神聖ノ審査トイフ能ハザルナリ。」⁴⁶⁾と述べた。

8. あとがき

神坂雪佳と京漆器については、すでに62年5月の意匠学会研究例会で発表⁴⁷⁾し、京工試研究報告No15⁴⁸⁾には、雪佳関連年表と若干の出品物の図、写真を含めた小論を掲載した。

この一文は、当然これらの内容と重複している。ただここでは、研究報告では触れなかった、光景、雪佳図案の漆器意匠の技法概要、それら意匠と当時の漆工界の状況との関連の考察を主体とした。同一文の転載ではない。

なお、明治37年以降の雪佳の活動については、機会を得て発表したいと考え、資料を集めている。

この研究は、かつて本誌23号書籍紹介欄に発表した『京漆器』¹²⁾⁴⁹⁾のための共同研究を引継いだものであり、当時の関係者には、多くの御教示と資料提供を頂いた。そして本テーマに関しては、別に京都市立芸術大学榊原吉郎教授、夙川学院短期大学緒方康二教授、シーグ社出版増田武文氏、京都市美術館井上明彦学芸員、そして雪佳作品所蔵家各位に御教授御協力を頂いた。共に厚く御礼申し上げる。

文献

- 1) “神坂雪佳遺作品展覧会出品目録” (1944・5)
- 2) 神坂吉明：“雪佳遺作集” (1944・10・20)
- 3) 京都府立総合資料館：“京都府百年の年表” 8 美術工芸編 (1970)
- 4) 榊原吉郎：“近代の琳派神坂雪佳” 京都書院 (1981)
- 5) 榊原吉郎：“神坂雪佳画囊” 京都書院 (1982)
- 6) 榊原吉郎：“神坂雪佳の見たグラスゴー万国博覧会” 京都市立芸術大学研究紀要30号 (1986)
- 7) 高梨光司：“稲畑勝太郎君伝” 稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記刊行会 (1940)
- 8) 第5回内国博覧会審査官列伝 (1903)
- 9) 浦崎永錫：“日本近代美術発達史” 東京美術 (1974)
- 10) 京都市立芸術大学百年史編纂委員会：“百年史” 京都市立芸術大学 (1981)

- 11) 京都国立近代美術館編：“京都の日本画”（1986・10）
- 12) 京都漆器工芸協同組合：“京漆器近代の美と伝統”別冊資料編 光琳社（1983）
- 13) 奥谷松治：“品川弥二郎伝”（嵯高陽書院（1940）
- 14) 第3回関西西府県聯合共進会報告（1888）
- 15) 岸光景履歴書（1891書）
- 16) 下中弥三郎：“大人名辞典”2 平凡社（1957）
- 17) 中安信三郎編“新図案6”京都書林（1892・5）
- 18) 中安信三郎編“新図案10”京都書林（1892・10）
- 19) 京都美術協会雑誌 18（1893・11）
- 20) 京都美術協会雑誌 20（1894・1）
- 21) 京都美術協会雑誌 25（1894・6）
- 22) 繭糸織物陶漆器共進会 漆器集談会記事（1885）
- 23) 日本美術年鑑1 画報社（1911）
- 24) 京都美術協会雑誌 12（1893・5）
- 25) 京都美術協会雑誌 14（1893・7）
- 26) 京都市：“京都の歴史”8（嵯学芸叢林（1975・3）
- 27) 京都美術協会雑誌 16（1893・9）
- 28) 京都美術協会雑誌 17（1893・10）
- 29) 第4回内国勸業博覧会審査報告（1895）
- 30) 京都美術協会雑誌 38（1895・7）
- 31) 京都美術協会雑誌 46（1896・3）
- 32) 京都美術協会雑誌 44（1896・1）
- 33) 京都美術協会雑誌 49（1896・6）
- 34) 京都美術協会雑誌 51（1896・8）
- 35) 京都美術協会雑誌 52（1896・9）
- 36) 京都美術協会雑誌 72（1898・5）
- 37) 京都美術協会雑誌 73（1898・6）
- 38) 京都美術協会雑誌 68（1898・2）
- 39) 京都美術協会雑誌 69（1898・3）
- 40) 京都美術協会雑誌 42（1895・11）
- 41) 京都美術協会雑誌 64（1897・10）
- 42) 京都美術協会雑誌 65（1897・11）

- 43) 京都美術協会雑誌 80~83 (1899・2~5)
- 44) 農商務省：“臨時博覧会事務報告(下)〈1900年パリ万博〉(1902)
- 45) “図按”2号 百万堂(1902・3)
- 46) 京都美術協会雑誌 132~134 (1903・6~9)
- 47) 山内明：“明治中期の京漆器意匠”一意匠革新への動きと神坂雪佳—第111回意匠学会研究例会(1987・5)
- 48) 佐藤敬二，山内明：京都市工業試験場研究報告15・113(1987・8)
- 49) 京都漆器工芸協同組合：“京漆器近代の美と伝統”光琳社(1983)